

生徒会 B L S S

合計点 <+22>

タイトル <点数/評価者 : コメント>

生徒会 B L S S

合計点 <+22>

タイトル <点数/評価者 : コメント>

白金虹羽 (クール攻め) × 与井雲 (オヤジ受け) <+1/何かの吸い殻 : クール系じゃなくて、ヤンキー系じゃないか...>
阿摩羅職あらか (子犬系爽やか攻め) × 王里解 (ツンデレ系受け) <+3/何かの吸い殻 : あらかの攻めが、これから強く

なるんですね、分かります>

無題 <+1/何かの吸い殻 : 攻めをもっと的確に、せっかくの兄弟という要素が台無しです。もっと弄ぶなりしないと>

あらかハード その1 <+1/何かの吸い殻 : 武将はこんなの朝飯前ですね>

【白金 × 木下】 <+3/何かの吸い殻 : これはいいラブコメですね>

あらかハード 第2話 <+2/何かの吸い殻 : 凄く面白いけど、B L じゃない気がしてならない>

ガチムチ B L 忠義ソング <+2/何かの吸い殻 : いい男に.....やまだぁー！>

『金曜午後7時Don' be shy』 <+2/何かの吸い殻 : うぬ。元ネタを知らぬ>

『ふじこふじおランド』 <+2/何かの吸い殻 : 確かに不二子不二雄だ。Aが入って...>

(無題2) <+2/何かの吸い殻 : 白金一族はB L 要員なのでしょうか？>

あらかハード 第3話 <+3/何かの吸い殻 : 『性のキッチン』の間違いではないでしょうか？ すごく、面白いです>

白金虹羽 (クール攻め) × 与井雲 (オヤジ受け) <+1/何かの吸い殻 : クール系じゃなくて、ヤンキー系じゃないか...>

「与井さん、あんたまたやったの」

...うるせえヤツが来やがった。

体育館の裏、こっそりやっていたチンチロリンを終始見ていたといわんばかりに虹羽は言った。

校則でギャンブルが禁止されてるのは分かってらァ。それでもオレは勝負師の端くれなんだ。

オレは小さく舌打ちしてから、タバコに火をつけて虹羽をギロリと睨み付ける。

「...ずっと見てたなんておめえ本当に暇人だな。おぼっちゃんも野球でもやってる、野球でも」

いつもそうだ。オレがこっそり校則をかいくぐってギャンブルをやっていると、いつの間にか虹羽が

現れてオレに話しかけてきやがる。

...面倒臭エ。こんなヤモメのオヤジに話しかけて何が楽しいのかね。

すると虹羽は「ほら、これ」と言ってオレに缶コーヒーを手渡すと、そのままオレの横に座り込む。

「オレ、別に野球なんて本気でやる気ないし。それだったら与井さん見てるほうが面白い」

「は？意味がわかんねえよ」

受け取った缶コーヒーのプルトップを遠慮なく弾く。

カコン、といういい音をさせて開いた缶コーヒーを片手に、啜っていたタバコを手にしてふーっと

煙を吐いた。瞬間、その場にすっと紫煙が舞う。

...虹羽は初めて逢った時からつかみどころのないヤツだった。

オレがギャンブルをこっそりやっつていようと上にチクるわけでもなく、オレにまわりつく。

それで毎回「面白い」なんて言われても、オレには気味の悪い人間以外の何者でもない。

しかし悪いヤツじゃねえのも確かだった。今日だってなんだかんだで差し入れは持ってくる。結局のところ、どう対応していいのか分からずにこんな感じ...毎度適当に付き合っているわけだ。

「お前、結構モテてんじゃねーか。野球やらねーんだったら女のところにでも行けよ」

腹の立つことにこの優男、整った顔立ちをしているおかげだろう。

女子生徒にはいたって評判がいい。

そのくせいつもオレのそばにいるものだから、女子生徒からの批判は大抵オレの方に来る。

面倒臭エことこの上なし。まわりつかれてるのはオレの方だってんだ。

グビビ、と思いきりノドを鳴らしてコーヒーを流し込みながら視線を送ると、虹羽は我聞せずと

いったところか...まるで興味がない、という表情を浮かべながら

「オレ、与井さんが好きだから他なんてどうでもいーし」

「だからよー。そういうセリフは女に向かって言えっての。

冗談でもオレみたいなオヤジに言うセリフじゃねーよ」

...相変わらずつまらねえ冗談はきやがる。真顔でそんな冗談言うなよな。

こんなこと聞かれたら、また勘違いした女子生徒に何を言われるか分かったもんじゃないやねえ。

オレは小さくため息をつく。もう一度タバコを啜えよう...そう思っていたときだった。

突然唇に感じる、暖かな感触。

それが虹羽の唇だと気づいたのは虹羽がオレへ向かって

「...オレ、冗談とか言わないし。本気で与井さんが好きなんだけど」

...そんな馬鹿げたセリフをはいた時だった。

「お、お前...ッ!？」

自分の顔がどんどん熱くなるのが分かる。

いったい何が起こったのか、それを理解するにも時間がかかった。

...虹羽がオレを好き？オレ、男だぞ？オヤジだぞ？博打のせいで女房も逃げた身だぞ？

いろいろなことがオレの頭の中でぐるぐると回る。

しかし虹羽はそんなオレを見ながらも顔色ひとつ変えずに

「オレあんたのこと良く知ってるよ。昔ヨメさんがいたことも知ってるし。でも別に気にしねー」

「お、お前が良くてオレは気にするんだよ！オヤジをからかうんじゃないよ！」

思わず語気も荒くそう言いながらその場に立ち上がるが、虹羽はオレの腕をしっかりとつかんで

放しやしねえ。...こんな細い体のどこにこんな力があるんだよ。

「...興味ねえ人間にこんな時間割かねーよ。だからあんたも『からかってる』とか言うなよ」

オレはいつだって真剣だったの。そう最後に呟いて、虹羽はオレを引き寄せた。

「あんた、可愛いもん。自分で気づいてねえだけで、オレ、ずっとあんたしか見てねーし。
...好きだよ、与井さん」

ああ、そうか。

虹羽がワケの分からねーヤツだと思いながらも一緒にいたのはこういうことだったのか、
おかしいよな、野郎から本気で好かれて気持ち悪イっていう感情よりも嬉しいが勝つなんてよ、
...なんだ、オレもなんだかんだでこいつのこと少なからず...好きだったんじゃないか。

「...オレ、下手するとお前の親父ほど歳はなれてんぞ」

「知ってる」

「昔、結婚失敗してるし」

「それもさっき言っただろ、知ってる」

「...何よりも男だぞ」

「それでも好きなんだからしょうがねーじゃん」

しょうがねえ、か。

...若いってすげえな。

「明日もここでチンチロやるからよ...良かったら見に来い」

「当たり前じゃん」

はじめて見た、虹羽の笑顔。

オレはそれにつられて一緒に笑った。

博打を校則で禁じられて、つまんねえなあなんて思っていた学園生活。

それも...虹羽のおかげで少し変わりそうだ。

そしてきっと、言葉通り明日も虹羽はオレに逢いに来るだろう。

...少しだけ変わったふたりの関係に喜びながら。

阿摩羅職あらか（子犬系爽やか攻め）×王里解（ツンデレ系受け）<+3/何かの吸い殻：あらかの攻めが、これから強くなるんですね、分かります>

「あれ...？王里さんじゃないっすか？」

...マズイ、気づかれた。

六感のみで生きているあらかのいるテニス部に紛れ込んでいたのがまずかったのだろうか、オレは慌てて「ちょ、ちょっと向こうで話でもしようか、あらかくん！」とあらかの手を引いてコートの後にする。ぼかーんとしながらオレたちを見つめている部員がたくさんいたが知ったこっちゃない、むしろここでオレが王里だとバレルことの方が問題だからだ。

「お前...オレのこと知ってるのかよ...」

人気のない校舎の裏まであらかを連れて行くと、オレはもう演技をする必要もないだろうと普段の自分を出すように...ぼそりぼそり、と小さな声でそう言った。正直、今回は上手くいったと思っていた。誰もオレのことに気づいていない、そう思っていたのに、するとどうということだろう、あらかはオレにむかって「あははは」なんていい笑顔で笑ってきたのだ。

「な、なんだよ...そんなにオレのしていることが笑えることなのかよ...！」

気の弱い自分がしている、『ツヨイモノへのなりきり』という行為、
そうすれば気の弱い自分が隠せる。誰もがオレを敬ってくれる。
なのに、こいつは笑った。まるでオレのことをバカだとでも言わんばかりに、
オレは自分の中から溢れるどす黒い何かを感じながら、思い切りあらかを睨みつけた。
しかしあらかはそんなオレの考えを読み取ったのだろうか？「スイマセン」と一言だけ放つと

「違うんですよ、オレ、そういう意味で笑ったんじゃないって」

「...じゃあ何だって言うんだよ、オレにはバカにしたようにしか感じなかったぞ」

「だからスイマセンってば！ 本当に可愛い人っすね、王里さんって」

いちいちそんなことも気になるんですね、なんて言いながら微笑みは消えない。

...っていうか...可愛い人ってなんだよ、それ。

「男が可愛いとか言われて喜ぶとでも思ってんのかよ...やっぱりバカにしてんな、お前」

「だから一、違いますって！」

あらかはそれだけ告げると、オレの頭にぼん、と手を乗せて、
そしてオレが何か言う前にわしわしと思い切りオレの頭を撫でたのだった。

「お前、何を　　！」

「　　オレ、今ほど触感がなくて悔しいって思ったことないっす」

「...は？」

あまりにも間の抜けた声だと自分で思った。
何故ならば、あらかの言っていることが到底理解できなかったからだ。
...オレの頭なんかの感触がどうだってんだ。

するとあらかは少しだけ苦笑を浮かべると

「オレは六感のおかげで結構他の人の考えてることとか、分かるんス。
今だって王里さんの言葉も、考えてることも分かる。それは幸せだけど悲しいことです」

自分を見て欲しくても、見てもらえないオレ。そしてその真逆にいるあらか。
何を贅沢言ってるんだ、オレなんて、頑張ったって『オレ自身』を見てもらえることはないのに。
しかしあらかはそんなオレの気持ちも読んだのだろうか？

「贅沢だっていうのは分かってます。けど...オレが考えてることは相手に伝わらない...
今だって、オレの真意なんて王里さんには伝わってない...それは、やっぱり、悲しいことです」

「しん、い...？」

悔しそうに告げるあらかに、オレは呟くよう返事する。
それに返事するように、今度は「ははは」と乾いた笑いを浮かべて、あらかは言った。
ずっと、ずっと、伝えたくても伝えられなかったんだろう...一言を。

「オレは、王里さんのことずっと見てました。見えない目で、ずっと追っていました。
だから、心配しないで下さい、王里さんのこと見てるヤツはここにいるんです。
...オレは、ずっと王里さんが好きでした」

...その瞬間、やっと分かった気がした。

何かを伝えたくても、本当の気持ちだけは伝えられないあらか。

何かを伝えたくても、それを捻じ曲げて表現するオレ。

なんだ、オレたちは似てるんだ。それぞれやり方が不器用なだけで、似てるんだ。

「...オレ、お前が思ってるような人間じゃないと思うぜ...暗いし、一緒にいても多分つまんねえよ」

「そんなことないっすよ！オレがいつから王里さんのこと見てたと思うんスか！」

「...お前、底抜けにバカなんだな...オレみたいなヤツが好きなんてバカだよ...」

言いながらなんだか涙が出そうになって、思わず俯きながらぼそりと呟く。

そんなオレを...あらかはぎゅっと抱きしめて

「ああ、やっぱり触感がないって辛いなア。こんなにも好きな人が腕の中にいるのに」

「...。...その分お前が満足するまでここにいてやるよ」

「じゃあ王里さん、ずっとこのままっすね！」

ははは、とさわやかに笑うあらかの腕の中。

オレは気づかれぬように小さく微笑んでから「パーカ」とまた一言こぼしたのだった。

無題 <+1/何かの吸い殻：攻めをもっと的確に、せっかくの兄弟という要素が台無しです、もっと弄ぶなりしないと>

「白金くんは、やっぱり野球部に入るのかな？」

背後から声をかけられ、白金は振り向く。
放課後の校庭で、野球部の練習をぼんやり眺めていたときのことだった。

「あんたは確か……、名前なんだったっけ？」

「名前なんて気にしなくても、お母さんでいいわよ」

答えながら、お母さんは柔らかな笑みを浮かべる。
お母さんのことは入学式で顔を見かけたただけだったけど、年齢を感じさせないほどの美しさが印象的だったので、よく覚えていた。
しかし、クラスも違うし、特に親しいわけではない。そんな彼女が、なぜ俺に声を？
疑問に思いつつも、白金は一応、年上は立てる主義なので、素直に答えた。

「俺の野球はあくまで趣味レベルさ。部活に入ってまでやりたいとは思わないよ」

「そう、それは都合がいいわ」

「え？」

「ううん、なんでもないわよ。ところで白金くん、ちょっとこのジュース飲んでみない？ 手作りなのよ」

そう言ってお母さんはペットボトルを差し出す。
パッケージには、「とろっとろ桃のフルルーニュ」と書かれていた。

「よしてくれよ、お母さんのジュースって、美味しすぎて昇天しちゃうって評判だぜ？」

「大丈夫、大丈夫。これは製品的なあれとは違って、ちょっとだけ独自に手を加えたあれだから、身体に影響は無いわよ。
ようするに、いつもみんなに振る舞ってる物とは違う、白金くんのために作った特別製のあれなの」

そこまで言われると、飲まないのは失礼かもしれない。
それにそのジュースは、とっても美味しそうなのだ。
純粋に、どんな味なのか興味がわいてきた。

「じゃあ一口だけ」

恐る恐るペットボトルを受け取り、ゴクリと飲み込む。
次の瞬間、白金は気を失って倒れた。

目を覚めたとき、白金は自分の手足が鎖につながれ、壁にはりつけられていることに気が付いた。
もがいても身動き一つ取れず、しかもよく見れば、衣服がビリビリに引き裂かれているではないか。
あらわになった自分の白い肌を見て、柄にもなく羞恥に頬を赤く染める。

「お目覚めかな？ まさかこんなにも簡単に引っかかってくれるとは思わなかったよ」

突然の声に顔を上げる。
暗い教室の中、白金の前には一人の男が立っていた。
顔はよく見えないが、彼の足元には鍋と包丁、そして変装道具のような物が散らばっている。
あれは、お母さんの持ち物？ ではこの男が、お母さんになりすまして、俺に近づいた……？

「貴様……、俺に、何をした？」

「ふっ、説明する義務はないね。生殺と奪は僕が握っている。君はそのことだけを理解していればいい」

そう言ってお母さんは眼鏡を軽く押し上げる。
そんな彼の背後から、別の男が顔を見せた。

「悪いな、虹羽、これも任務ってやつだ」

「なっ！？ ど、どうして兄貴がこんなところに！？」

そう、そこにいたのは、虹羽の兄である翔一郎だった。

「うちの生徒会長サマときたら、是非ともお前のことが欲しいってうるさくってね、生徒会の一員としては、従うしかないのさ」

まるで悪びれた様子もなく、翔一郎は肩をすくめる。
どうやらこの生徒会長とやらを止める気はないようだ。

おかしいぞ、自分が知るかぎり、翔一郎はこんな男じゃなかったはずだ。
もしかして何か弱味でも握られているのか？
それとも翔一郎の心はずでに、この生徒会長に支配されているとでもいうのだろうか？
戸惑う虹羽を余所に、眼鏡の男は笑みを大きくする。

「さて、調教開始といこうか。準備をしろ、翔一郎」

男が指を鳴らすと、翔一郎はやれやれといった感じで再び肩をすくめる。
いつの間にかその手には、口にするもはばかられるような、いかがわしい道具が握られていた。
狂っている。何もかもが狂っている。
実の弟を相手に、兄責は何をしようとしているんだ！

「安心したまえ、時間はたっぷりある。いずれは君の方から僕のことを求めるようになるさ。さあ、やれ、翔一郎」

「イエッサー、BOSS」

「や、やめる……、やめる——っ！」

こうしてまた一人、希望崎生徒会に忠実な僕が誕生したのであった。

あらかハード その1 <+1/何かの吸い殻：武将はこんなの朝飯前ですね>

阿摩羅識あらか 屁理屈好きのテニス部員
真野 恭火髑 幼馴染のレイブ魔
張遼 恐るべき武将

ある日の番長小屋

「よーし、ドラフト案が出来たわ！」

「へえ……」

「ねえ、真野、ちょっとこの案をどう思……」

「うるあー！」

ビリビリッ！

無常にもあらかの服を引き裂く真野

「真野ッ！ちよ！やめっ……」

「てめえ、ドラフトなんて考えてんじゃねーよ！」

「な、なにをいってるの……？」

「うるせー！俺はうるさいやつが嫌いなんだよ！」

「でもチームメイトとして……モグッ!?」

「へっへっへ うるせえ口を塞いでやったぜ」

「モグ、モググ」

「きこえないなあ。コンボがなんだって？」

「ひゃいへんなんへ」

あらかの口内に真野の白濁とした汁がぶちまけられようとしたその瞬間、

「股間ウどの降伏するぞわす」

ズボッ！

あらかをレイブする真野のアナルを攻める者が一人

「ぐへえ！だ、誰だ……」

「張遼ぞわす」

「誰ッ!? 誰なのッ!？」

「張遼ぞわす」

名だけ言うと、

張遼は一心不乱に真野のアナルを攻めたてる！

「うわああ、裂ける、俺のアナルが裂けちまう！」

「そうぞわすか」

「スゴイ！張遼のが、真野を通して伝わってくる……ッ!!!」

「そうぞわすか」

『『『遼来遼来ッ!!!』』』

未完

【白金×木下】 <+3/何かの吸い殻：これはいいラブコメですね>

木下はG Kの心の良識を理解してる男の一人なのだが
今回のダンゲでもそのフェアプレーな精神あきらかになったのだが

さすがに特能も盾スキルもないこのような弱体状態では危ないと
また一人別のおなじく一級レベルのフェアプレー使い手である白金が
心配が鬼になって木下に話しかけてるのを見た

これが証拠ログ

白金>木下さんちょっといいですか
木下>何か用かな？
白金>特殊能力ありますか？
木下>ない
白金>そうですかありがとうございますステータスすごいですね
木下>それほどでもない

しかし木下が無理をしているのはバレバレで
白金が「オレが盾になるから木下は心配ひ不要」と
言っていたおまけに「戦いはじまったら俺の傍はなれるなよはなれたら死ぬ」
木下は「汚いなさすが白金きたない」ともじもじしたので
物陰からそっと見ていたナイトは気を利かせて
その場からとんずら使って立ち去った

さすがナイトは同級生たちのBLも見守るし格が違うなと思った
これで新入生の馬術部LS入りも加速するのではないかな？
まあ一般論でね

あらかハード 第2話<+2/何かの吸い殻：凄く面白いけど、BLじゃない気がしてならない>

阿摩羅識あらか 召喚能力を持つテニス部員
真野 恭火體 茶の間の空気を和ませるレイブ魔
張遼 ずっと前(三国時代)からコッソリいる武将

ある日の番長小屋
ギシギシ

ベットの上でいつものようにあらかはレイブされていた
「なんで黄色いスク水着せられてんのよ!!!」
「うるせー 裸で何が悪い!!!」
「なにそれ答えになってないじゃない やめてよ」
「ふん そんな事を言ってもお前の股間の地デジアンテナは正直だな」
「そんな事してると私の能力で酷い目にあわせるよ」
「うるせー やれるもんならやってみやがれ!!!」
「範馬勇次郎召喚!!!」
ズボッ!!
「はわわ」
突如現れた武将にアナルを攻め立てれるあらか
「召喚されたU次郎でござす」
「張遼じゃない!!!」
「U次郎でござす」
「裕次郎はそんな北方騎馬民族みたいな顔はしてないわ!!!」
「それにあなたNPCじゃないじゃん」
「おいどんはNo Price Characterつまり著作権フリーのハンマーU次郎でござす」
「なるほど!!じゃあ俺も著作権フリーのアナル熊だ!!!」
「そんなこと言ってこのネタだって かがみハードのパクリじゃない!!!」
「そんな事よりあらかどのケツの穴はまるで初物(ルーキーズ)でござすな」
「まったくだ 恥デジアンテナも俺のアナルで爆発寸前だぜ!!!」
「ちょっとは著作権の事考えなさいよ!!!」

『『『大目に見てねッ!!!』』』

ガチムチBL忠義ソング<+2/何かの吸い殻：いい男に.....やまだあー!>

元ネタ <http://www.youtube.com/watch?v=JSS-XXApgvU>

歌詞は日本語版を参照にしたけど
映像的にはこっちがおススメ

<http://www.youtube.com/watch?v=AO43p2Wqc08>

『マッ張マン』

歌 忠義心(張遼 張飛 張任)

エイ！エイ！エイ！エイ！エイ！
エイ！エイ！エイ！エイ！エイ！
エイ！エイ！エイ！エイ！オー！

マッチョ マッチョマン
みんな憧れるマッ張飛マン
マッチョ マッ張任マン
みんな憧れマッ張遼ー！Ow...

Body...パンプアップ My Body
Body...輝く My Body
Body...したたる My Body
Body...謎めく My Body
Body...チェケラ My Body
Body...チェケラッチョ My Body
Body...狂わす My Body
Body...Body Body Body Body !

朝目が覚めたら なったマッ張遼マン
ムキムキムチの身体のマッ張飛マン
兄者や弟者もビックリフェイス
昨日までのヨロイもう キツキツさ
短パンタンクトップで GO GOマッ張遼マン
戦場の話題を 独占マッ張遼マン

エイ！エイ！エイ！エイ！オー！

マッチョ マッチョマン
みんな憧れるマッ張飛マン
マッチョ マッ張任マン
みんな憧れマッ張遼ー！Ow...
マッチョ マッチョマン
兄者が大好きさマッ張飛マン
マッチョ マッチョマン
超回復 マッ張遼ー！Ow..

Body...とろける My Body
Body...匂い立つ My Body
Body...食い込んだ My Body
Body...肉厚 My Body
Body...チェケラ My Body
Body...チェケラッチョ My Body
Body...狂わす My Body
Body...Body Body Body Body !

一騎打ちの授業も独占マッ張飛マン
血管浮き出た上腕二等筋
漢も漢もウツリフェイス
曹操でさえペコペコさ！
ついたアダ名もまんまでマッチョマン
義兄弟に選ばれマッ張飛マン

エイ！エイ！エイ！エイ！オー！

マッチョ マッチョマン
みんな憧れるマッ張任マン
マッチョ マッ張飛マン
みんな憧れマッ張遼ー！Ow...
マッチョ マッチョマン
二君に使えないマッ張任マン
マッチョ マッチョマン
超回復 マッ張遼ー！Ow...

エイ！エイ！ エイ！エイ！エイ！
エイ！エイ！ エイ！エイ！エイ！
エイ！エイ！エイ！ エイ！エイ！エイ！
エイ！エイ！エイ！エイ！エイ！エイ！エイ！

エイ！エイ！ エイ！エイ！エイ！
エイ！エイ！ エイ！エイ！エイ！
エイ！エイ！エイ！ エイ！エイ！エイ！
エイ！エイ！エイ！エイ！エイ！エイ！オー！

マッチョ マッチョマン
忠義の心のマッ張任マン
マッチョ マッチョマン

みんな憧れマッ張遼ー！Ow...
マッチョ マッチョマン
一騎打ち後酒飲んでマッ張飛マン
マッチョ マッチョマン
超回復 マッ張遼ー！Ow...

マッチョ マッチョマン
みんな恐れるマッ張遼マン
マッチョ マッチョマン
みんな憧れマッ張遼ー！Ow...
マッチョ マッチョマン
江東の民も逃げだすマッ張遼ーマン（遼来遼来！）
マッチョ マッチョマン
超回復 マッ張遼ー！Ow...

セリフ 張遼でござす ウホやらないか？

『金曜午後7時Don' be shy』 <+2/何かの吸い殻：うぬ、元ネタを知らぬ>

薄暗いスタジオでベルフェゴールは裸身を晒していた。
その姿ふじこふじおがスケッチブックにデッサンをしている。
いつものふじこは別人のような真剣な眼差し。
その鋭い視線が自分の身体に刺さるたびに、ベルフェゴールはくすぐったいような気恥ずかしさを感じていた。

最初に頭を見回され、次は胸。
それほど熱心な視線を注がれたことなどこれまで一度も無かった。
そう、だから、そのせいに違いない。この、気持ちは...

段々と視線が下がってくる。
次は...

軽快に鉛筆を走らせていたふじこが一瞬とまる。
「おや」

「あ、いや、ちがう、違うんだ」
ベルフェゴールはあわてて自分の身体の変化を誤魔化そうとする。
しかし身体を隠すものの何も無いこの場所では無駄な行動だった。

「困りましたね、これは」
クスリと笑いながら席を立ててふじこが近づいてくる。

「悪い、やっぱり今日はここで...」
目が合ったと同時に言葉が続かなくなった。
視線が、さっきまでと同じ...いや、それよりももっと熱っぽい。
射すくめられたベルフェゴールの腕にふじこの手が掛かる。

「隠さないで、もっとよく見せてください。貴方の正直な気持ちを」

『ふじこふじおランド』 <+2/何かの吸い殻：確かに不二子不二雄だ、Aが入って...>

ふじこ「そう・・・旨いよ、スイガラ・・・すごく・・・もうショコラでトレビアンだよ・・・」
時と共に激しさを増すスイガラの虹のピオレッタに、ふじこは愛フォルテシモしていた。
正直、初体験のスイガラでは充分満足できるペロペロキャンディキャンディは得られないと思っていたのだが、
スイガラの激しいアンコロモチストーリーズは思った以上のジャイ子さん。

スイガラ「お兄ちゃん、どう？日出処は天気？」

ふじこ「ああ・・・すごく、キテレツ大百科だよ・・・」

自分の上で腰をアサルト・ヘイズするスイガラの内臓式発煙筒を愛撫する。

ふじこ「愛してるよ、スイガラ・・・こんなバラソルヘンベえしちゃった以上、もうお前をポコニャンしたりしないから・・・」

スイガラ「うん・・・う、ん・・・ポコ・・・ニャンなんかするな・・・俺たち・・・もうブラック商会変奇郎だろ・・・！」

ふじこはスイガラのウメ星デンカを舌でチンパイし、スイガラはアサルト・ヘイズを更にスイガラカスタムする。

ふじこ「ああ・・・お前は最高のモジャ公だよ・・・！」

スイガラ「俺・・・もう・・・ダメ・・・来る！魔太郎がくる！！」

スイガラの発煙爪はもうストライクスイガラだ。

するといきなりお母さんが急に扉をキリンビバレッジした。

お母さん「あんたたち・・・ディアボロ・ジンジャー！！」

(無題2) <+2/何かの吸い殻：白金一族はBL要員なのではないですか？>

暗い生徒会室の真ん中で、吸殻あJは正座したままうなだれていた。
その額には冷たい汗が流れている。
生徒会長が、静かに彼を見下ろしていた。

「聞いたよ、校長と戦うんだってね」

「はい……」

「まあ、頑張りたまえ。応援してるよ」

「あ、ありがとうございます」

「ところで、君は『ガスを漏らす人物』を自分の手駒には選ばなかったらしいね」

「そ、それは……！ ち、違うんです、聞いてください！」

「質問してるのはこっちだよ、YESかNOで答えろ」

「だ、だって、俺も勝ちたいんです！ 真剣なんです！ あんな勝つ気のなさそうな奴を使うことは……」

「ほう、敵に攻撃されなきゃ能力を発動できない奴は、『勝つ気のない奴』だと、そう言ってるのだね？」

「い、いえ、違います！ 会長は違いますって！」

「どうやら君には生徒会役員としての自覚が足りないようだな」

生徒会長が指を鳴らすと、その後ろから一人の人物が現れる。
白金神刺。
彼もまた、希望崎生徒会の忠実なる僕である。

「欲しいんだろ、この男のことが、ならば思う存分、味わうがいい」

白金はあJの背後に回り、腰を持ち上げると、紳士的に突き上げた。

「ああっ！ さ、刺さってる！ 神様刺さってる！」

「その突き上げは、時間が経つほどに鋭くなっていくぞ。果たしていつまで耐えられるかな？」

「そ、そんな！ 今でもきついの、これ以上！？」

「当日はその格好のまま校長と戦え。いいか、これは生徒会長命令だ」

生徒会長は邪悪な笑みを浮かべ、背を向けて部屋から出て行こうとする。

「待ってください、会長！ 会長ーっ！」

叫びもむなしく、部屋には二人だけが取り残される。
その間も白金は突き上げるのをやめない。

「さあ行こう、あJ、さらなる高みへ……」

「や、やめろ……、やめろーっ！」

黒薔薇の芳香が満ちる中、あJの意識は徐々に遠のいていくのだった。

あらかハード 第3話 <+3/何かの吸い殻：『性のキッチン』の間違いでないではないですか？ すごく、面白いです>

阿摩羅識あらか 後手にまわるテニス部員
真野 恭火體 運動は得意ではないレイブ魔
張遼 ガチムチ武将
敷香飛士 山暮らしと鷹狩で鍛えた、足腰が自慢の鷹匠
おかあさん 世界のおかあさんに負けられない

ドラフトの夜

「ああ 吸い殻あ」をとられたわ！！ どうしよう」

「うるせー お前は黙ってケツのA」(アナルジャスティス)ひらいてりゃいいんだよ！！」

「ひどい！！ 敷香さん助けて！！」

「なにしてんの？」

「レイプされそうなの助けて！！」

「服を脱がなければ良いんじゃないかなあ」

「その手があった！！」

ズボッ

しかし服を着たままレイプされるあらか

「し 敷香さん？！」

「僕の股間の『インランマッカ レタル カムイ』(誇り高き白の神)はZOC無視&壁貫通だけどね！！」

「はわわ は はげしい」

自慢の足腰による激しい責めに第六感で感じてしまうあらか

「しかたねえ俺は今回見にまわるか！！」

「だれか助けて～」

ズボッ

「忒本刺しでござす」

「また張遠なの？」

「張遠でござす」

「何度もいうけど貴方NPCじゃないでしょ！！」

「なんども言うでござすが おいどんはNO Penis condomつまりコンドーム無しの生出しミントジュレイプソーダ張遠でござす」

「はじめて聞いたわよ！！」

「じゃあ俺はとろとろ桃のフルーニュ(どうみても精子です)をぶっかけてやんぜー」

「僕のレイプ漬けはみちつレモンはいかが？」

おかあさん「あんたたち何してんの？」

『『『世界のキッチンからッ！！』』』』